

人口減少時代の  
家族・学校・地域・社会

～生涯にわたる学びと教えの新たな可能性を求めて～

馬居政幸・角替弘規 共編著

NSK出版

◆表紙のイラストについて◆

「人口オーナス時代の産業システムと資質・能力育成」をテーマに、社会科産業学習のモデル図として、漫画家の長野亨さんに描いてもらいました。

上半分に、さまざま産業がつながる循環の輪が、下半分に、教室を舞台に、いろいろな職業の方が参加する授業が描かれています。図の周りには、新学習指導要領のキーワードが配置されています。

いずれも本書のエッセンスをあらわした図です。第8章をご参照ください。

## はじめに

人口の減少が日本の未来を危うくする問題として大きく取り上げられたのは、2005年国勢調査の結果の報道とともにでした。そのためか、輿論の関心は全人口の減少に向けられ、研究者の世界では、経済学や財政学の対象となる問題が中心でした。

残念ながら、教育の分野では、児童生徒数の減少による小・中・高等学校の統廃合の検討を求められた教育委員会事務局の課題にはなりましたが、学校教育の内容に直結する教育課程や授業づくりを問題視するまでには至りませんでした。

本来、人口減少は同時進行する超少子・高齢化との相乗効果により、日本の公教育制度全体の転換を必要とする社会変動です。乳幼児期から高齢期までの多様・多元化する学びと教えのシステム全体の改編と改変が喫緊の課題となる理由です。しかし、このような事象や問題に関わる研究のテーマやグループを見出すことは困難でした。

それが5年後の2010年国勢調査で人口減少時代の現実の諸相が数値で明確にされたことを契機に、公益財団法人中央教育研究所の谷川彰英理事長から「人口減少問題と学校教育」プロジェクト設置の協力とメンバーの推薦を依頼されました。その結果2015年秋、谷川理事長を座長に人口減少による日本社会の変化と学校教育との関わりについての調査研究が始まり、角替弘規との最初の協働作業になりました。その成果は、2017年6月に『研究報告No.90 人口減少問題と学校教育』として公刊されました。

この報告書作成過程で収集・整序・蓄積されたデータを土台に、より広く家族、学校、地域、社会それぞれの現場で人口減少時代の課題に実践者として取り組む友の参加を得て、角替弘規と共に近未来の日本社会の課題を視野におく協働作業を始めました。その研究結果をⅠ、Ⅱ、Ⅲ部の構成により1～10章で著したのが本書です。

第Ⅰ部(1～3章)では、人口減少時代に入った日本社会の現状と課題について、2010年と2015年の国勢調査を基礎データに、3種の観点からの整理を試みました。

その一つは、人口減少社会への転換のメカニズムを明らかにすることです(第1章)。その二つは、人口減少によって生じる日本社会の変化の特性と問題点を把握するための基本データとその解釈のモデルと方法の提示です(第2章)。その三つは、増加する外国人と外国にルーツを持つ子どもたちの現状の開示です(第3章)。

第Ⅱ部(4～6章)では、3種のフィールドにおいて、人口減少社会への転換を避け得なかった要因の淵源に遡り、第Ⅰ部で指摘した問題の根の掘り起こしに挑みました。

その一つは、2002年3月から1年、韓国慶熙大学客員研究員として行った韓国低出生率と日本少子化の国際比較による出生率低下の社会的文化的要因の析出です(4章)。

その二つは、韓国から帰国後に全国各地で行った育児支援調査に文部科学省の学力調査を重ね、“秋田：高齢化率最上位→学力最上位”と“沖縄：出生率最上位→学力最下位”の“家族の生活”と“学校の授業”の比較研究により、都市の大学ランクと社会的上昇可能性を評価基準とする「学力」の“功（人の材と才の配分+地方と都市の循環システム構築）”と“罪（人の再生産システム解体）”の開示に挑みました（5章）。

その三つは、90年代からの子育て支援と女性行政の調査活動で体得した高学歴の専業主婦のおかれた状況の理解を手掛かりに、母親に求められる能力と学校教育の内容・評価基準との乖離の奥に埋め込まれた人口減少の根源を問う試みです（6章）。

第Ⅲ部（7～10章）はⅠ・Ⅱ部での問題提起を受け、共著者24名との協働で各自が担う現場に根差した人口減少時代を拓く“戦略 strategy と戦術 tactics”の提示です。

7章は「人口減少時代を拓く『ヒト、モノ、コト』の再定義」、8章は「教室の中から未来創りに挑む」をテーマに、2015年国勢調査（特に将来推計人口）と2017年告示の学習指導要領のキーワードを活用し、“学びと教えの仕組み”に“人の生きる場のケア（支え合う心身）”を差し込む、社会システム再構築の方途の模索を試みました。

その実践化として、9章は「家族と学校」、10章は「地域と社会」での「学びと教えの新たな可能性を拓く」ために、人口減少先進の地と場と領域に身を置き未開の道を拓く11人の友に、日々の問題解決の過程から生まれる処方箋の執筆を依頼しました。

したがって本書は、第Ⅰ部を現在に、第Ⅱ部を過去に、第Ⅲ部を未来に視座を置き、「家族」「学校」「地域」「社会」の4領域から、人口減少時代を“誰もが共に生きる場”に再構築する条件を問い直す契機になることを願うColumn執筆者も含めた24名の友との共著です。研究や法制度の解説ではなく、全国の現場で生じる事象（ヒト、モノ、コト）に学ぶ書を届けることを編集原則にしました。超少子化と超高齢化の同時進行で顕著になった人口減少の現実の中で、新たなまちづくりを志す人たち、専門家を交えて活動するNPOのメンバー、行政の限界に挑む自治体職員や地方議員の皆さんと語り、聞き取り、プラン作りの現場に参加して教わり、学び取り、体得したヒト、モノ、コトの実相が本書の土台です。24名の執筆者も学びの現場で出会った友です。その意味で、本書は人口減少先進の地の現場を担う人たちとの協働から生まれた智と慧で綴られた書であることを編著者として感謝と誇りの意を込めて記しておきます。

これらの意義をふまえて、本書の冒頭に、谷川彰英中央教育研究所理事長と明治学院名誉教授の望月重信先生に特別寄稿をお願いしました。本書の生みの親として編者も含めて26名全員の執筆作業を暖かく見守って戴いた谷川先生に、また難問への貴重なご助言を戴いた望月先生にこの場を借りて心から御礼申し上げます。（馬居政幸）

# 目 次

はじめに

特別寄稿 「時代の先を読む」 谷川彰英

特別寄稿 「周縁からの知と行による再構築に期待」 望月重信

## 第 I 部 人口減少時代が始まる

### 第 1 章 人口減少時代とは・・・そのメカニズム …… 21

1. 日本の総人口が増加から減少に転換 22
2. 人口減少のメカニズム 24
  - 1) 減るのは子どもと働き手、高齢者は増え続ける 24 / 2) 始まりは出生数を死亡数が超えることから 25 / 3) 出生“率”から出生“数”の問題に 28
3. 推計値は過去の課題と問題を見るレンズ 29
  - 1) 団塊ジュニアの視点からみると 29 / 2) 推計値は未来ではなく過去を計る物差 33

### 第 2 章 人口減少がもたらす社会の変化とは …… 37

1. 人口減少下の日本社会の課題とは 38
  - 1) 人口減少の偏頗性 38 / 2) 人口減少社会への転換の経緯 41
2. 格差の構造化 43
  - 1) 地域間と世代間の差異から格差へ 44 / 2) 巨大都市圏では 44
  - 3) 小規模自治体では 45 / 4) 後期高齢期からみれば 46
3. 産業構造の変化による世代内格差の進行への危惧 49
  - 1) 3次産業中心の社会への転換と個人化の進行 49
  - 2) 社会保障システムと教育システムの再編 52

### 第 3 章 外国にルーツをもつ人たちと共に生きる社会に …… 57

1. 増加する外国人 58
  - 1) 在留外国人の量的増加と多様化 58 / 2) 訪日外国人旅行者 63
  - 3) 永住化傾向と国籍による違い 65
2. 外国にルーツを持つ子どもの学校における状況 67
  - 1) 外国籍児童生徒数の推移 67 / 2) 日本語指導が必要な外国籍児童生徒数の推移 68

## 第Ⅱ部 人口減少社会の淵源を遡れば

### 第4章 日本と韓国の少子化、高齢化、

#### 人口減少の進行と教育システム改変の課題 …… 75

1. 人口減少社会にむけて離陸した日本 76
  2. 韓国と日本の出生率、進学率の比較から 78
    - 1) 合計特殊出生率の変化の比較 78 / 2) 普通出生率（人口千人あたりの出生数）の変化の比較 82 / 3) 進学率、教育年数の性差、高齢化率推計の変化の比較 86
  3. 少子高齢化社会における教育システムの課題 90
    - 1) 韓国と日本の高齢化率推計の比較が示唆する教育改革の課題 90
    - 2) 個を生かす教育の課題を求めて 92
    - 3) 韓国の教育改革の課題—多様性に応じた新たな学力観の模索を 102
- Column4-1 人口減少社会における韓国公教育の再構築構想 107 / column4-2 日韓両国が共有する『地方創生』という問題について 112 / column4-3 二つの国の言葉を結ぶ学びと教えの道を歩み続けて 114 / column4-4 韓国との関わりを通じて、今思うこと 116

### 第5章 人口減少時代の学力問題 …… 119

1. 学力日本1の秋田は人口減少先進県、出生率日本1の沖縄は？ 120
  - 1) 秋田と沖縄 120 / 2) 学力低下論の陥穽 121
2. 人口減少先進県秋田の現実 123
  - 1) 人口減少社会の現実 123 / 2) 人口減少社会の課題 127
3. 学力日本1の秋田と出生率日本1の沖縄の教育事情 133
  - 1) 学力と生活習慣、体力、モラルの関係 133 / 2) 学力と就学前教育 134
4. 秋田と沖縄の学力と出生率の差異をもたらした社会的背景 138
  - 1) 年齢三分区人口構成の変遷 138 / 2) 少産化から少子化へ 140
  - 3) 人口ピラミッドの比較 143 / 4) 学力上昇のアイロニー 144
5. 学力問題への新たな問いを少子高齢・人口減少社会再構築の基盤に 148
  - 1) 最下位からの出発ではあるが 148 / 2) 学力問題への新たな問い 150
  - 3) 学力向上の方向は 153

Column5-1 沖縄の学力問題の現在 159 / Column5-2 少子高齢化、ジェンダーの視点—グローバル化の中の日本の今後 162 / Column5-3 秋田の未来へのメッセージ—始まりは全国最下位 166 / Column5-4 人口減少と学力向上、秋田にいて思うこと・・・ 170

## 第6章 少子化を求めた家族と女性のリアリティ …… 173

1. 高学歴・少子時代の母親のアイデンティティ 174
    - 1) 専業主婦の憂鬱 174 / 2) 二つの少子化 175
    - 3) 高学歴化がもたらしたもの 176 / 4) 選択された母の先にあるものは 178
  2. 親が親になりきれない背景 180
    - 1) 少子化の背景が示唆するものは 180
    - 2) 高学歴化と産業化の進行がもたらしたものは 182 / 3) 落とし穴はどこに 183
  3. 子育てが不安になる時代背景 185
    - 1) 子どものいる家族が少数派に 185 / 2) 親専業になる女性が少数派に 186
    - 3) 親になる学習の機会が失われる 187
    - 4) 子育ての目的と子どもの位置づけの転換を 188
- Column6-1 高校教師から二男二女の母に、そして議員に 190

## 第Ⅲ部 人口減少時代を拓く学びと教えの新たな可能性を求めて

### 第7章 人口減少時代を拓く「ヒト、モノ、コト」の再定義 …… 197

1. ヒトの分け方（年齢3区分）の再定義 199
  - 1) 再定義の課題とは 199 / 2) “年少”、“生産年齢”、“老年”に“人口を分ける先”への問いを 200 / 3) “従属”の“意味の多義化”で、“リアリティーの回復”を 205
- Column7-1 不安の現在を希望の未来に一少子高齢社会を拓く鍵— 210
2. ヒトの生涯を支えるモノ（仕組みと決め事）とコト（言葉と心）の再定義 215
  - 1) 「予測困難な時代」と「未来の創り手」を結ぶ“モノとコト”の“情景”は 215
  - 2) “制度(モノ)”の“揺らぎ(コト)”に可能性の“芽を見出す目(ヒト)”を 220
- Column7-2 貧困の構図 234
3. 国の境の内と外を隔てる制度と文化（ヒト、モノ、コト）の再定義 236
  - 1) 「移民」とは何か 237 / 2) 在留資格制度 238 / 3) 外国人は、いつか帰国する、という考えでいいのか？ 242 / 4) 外国にルーツを持つ子どもと日本の学校 243
  - 5) 日本人とは誰のことを指すのか？ 245

### 第8章 教室の中から未来創りに挑む …… 249

1. 新学習指導要領の課題と可能性 250
  - 1) 教える人と制度の再定義から 250 / 2) 新学習指導要領が描く授業者の情景 253
- Column8-1-1 事務室から見える子どもたちの優しさ、愛しさ、逞しさ 266

- Column8-1-2 学習指導要領改訂初体験録 268 / column8-1-3 特別支援学校教員として働く思い 269 / column8-1-4 ソウル市の初等学校から経験する少子高齢化 270
2. 社会事象の多様・多元・可変性と生きる場の学びの可能性を求めて 272  
 —社会に開かれた教育課程と6次産業社会の資質・能力—
- 1) 希望はワンピースモデル 272 / 2) 3億2000万部の秘密は 273 / 3) “読者一人一人との協働”による“誰もが主役”に 274 / 4) 時代の流れは3次産業・サービス業の側に 276 / 5) 授業づくりのキーワードは6次産業ネットワーク 279 / 6) 社会事象の多様・多元・可変性が求める授業づくりの再定義 281
3. 学校・家族・地域・社会を結ぶ学びと教えの再構築を 285  
 —カリキュラム・マネジメントの潜在力を拓く—
- 1) 新学習指導要領に観るカリキュラム・マネジメントと地域の位置づけ 285  
 2) 国勢調査が描く地域の有名無実化への道筋 287  
 3) 変化する家族と地域と社会、学校は？—子どもの「生きる力」の再定義を 294
- Column8-3-1 「命の大切さ」を育む教育のための3つのステップ 302  
 Column8-3-2 学園ドラマの教師像の変遷が描く学校教育の虚実 306

## 第9章 生涯にわたる学びと教えの新たな可能性を拓く 処方箋を求めて—家族と学校では— …… 313

1. 子育て支援の現場から—人口減少社会における子育ての課題 314  
 1) 家族の変容 314 / 2) 子育て支援における今日的な課題 317  
 3) 地域における子育て支援 319
2. 誰もが3歳から質の高い幼児教育を  
 —幼保小連携とスタートカリキュラムの視点から 322  
 1) 横浜の幼保小連携の取り組み 322 / 2) 次期学習指導要領改訂が目指す理念と「10の姿」 324 / 3) 「発想の転換」を促す横浜市での取り組み 326 / 4) 今後に向けて 328
3. 少子高齢・人口減少時代を生きる資質・能力を育む総合的な学習の時間 329  
 1) 実践研究の目的 329 / 2) 研究の概要 329 / 3) 授業実践 331  
 3) 少子高齢・人口減少社会を生きていくために 334
4. 義務教育を担う小中一貫校構築の現場から 335  
 1) 小中一貫教育の構想 335 / 2) 美郷南学園の概要 336 / 3) 地区唯一の「学校」として 337 / 4) 全教職員ですべての子どもに責任を持つ体制づくり 338  
 5) 新学習指導要領のコンセプトを先取りした教育実践 339 /



- 6) 人口減少地域における義務教育の可能性と課題 340
- 5. 教育委員会と首長部局の壁を超えるために
  - 「生涯学習を基盤とした教育システムの再構築」の志向— 344
  - 1) 教育政策から見た「学校」と「家族」 344 / 2) 教育行政体制の多様化 346
  - 3) 首長部局と教育委員会（事務局）の事例検討 348
  - 4) 家族・学校／地域・社会をつなぐために 350
- 6. 外国にルーツを持つ子どもの教育支援の現場から 351
  - 1) 日本語習得にかかわる課題 351 / 2) 教科学習における課題 352
  - 3) 教科外活動における適応上の課題 353 / 4) 保護者への情報提供 354
  - 5) 寄り添う姿勢 354

## 第10章 生涯にわたる学びと教えの新たな可能性を拓く

### 処方箋を求めて —地域と社会では— …… 357

- 1. 子どもの育ちの場の再構築を—「男女を分けるシステム」を問い直す— 358
  - 1) 子育て・子育ての中のジェンダー—非対称な関係性— 358 / 2) 生まれる前から男女に分けられる子どもたち 359 / 3) 男女を分ける場としての幼児教育・保育 360
  - 4) 子育て・子育ての場の再構築を 363
- 2. 誰もが異なる国と文化にルーツを持つ人に 366
  - 1) 求められる社会教育への再認識 366 / 2) 日常化するグローバル化 368
  - 3) 問われる境界線 369
- 3. 子どもも大人も同じ高さの目線でともに楽しみ学べる場所へ 371
  - 福山市立動物園の取り組み—
  - 1) 動物園において学べること 371 / 2) 動物園におけるジレンマ 371
  - 3) 家庭・学校・地域と連携して、動物園にできること 373
  - 4) 「かわいい」「ヤバイ」「ウケる！」の先にあるもの 375
- 4. 生涯学習施設を活用した市民協働のまちづくりの現場から 379
  - 1) 岡山市立公民館のESD活動 379 / 2) 対話によるまちづくり 381
  - 3) 防災・減災、包括支援をも視野に市民の生活と行政施策の結び目に 382
- 5. 地域包括ケアシステム構築の現場から ～静岡市の例～ 384
  - 1) なぜ地域包括ケアシステムが必要か 384 / 2) 地域包括ケアシステムの構築 385
  - 3) 今後の課題 388

おわりに 390